氏　　名	：	大泉　義一
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博乙第 77 号
学位授与年月日	：	平成２６年３月１４日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第２項該当　論文博士
学 位 論 文 名	：	「子どものデザイン」の原理と実践 ―我国における子どものためのデザイン教育の変遷から展望へ―
論文審査委員	：	（主査）　教授　小野　康男 （副査）　教授　有元　典文　　教授　小澤　基弘 教授　山田　一美　　教授　池内　慈朗

学 位 論 文 要 旨

申請論文「『子どものデザイン』の原理と実践 －我国における子どものためのデザイン教育の変遷から展望へ－ 」（以下「本論文」と記す）は，これまでの学術研究において注目されてこなかった子どものためのデザイン教育の変遷を辿ることから，その実践原理としての「子どものデザイン」概念を明らかにし，その原理を適用した実践プログラムを開発・実践検証することを通して今後のデザイン教育を展望するものである。本論文は，主に小・中学校における教育を対象とした教科教育学分野の研究論文である。この分野においては，これまでに「児童画」や「絵画・彫刻」といった，いわゆる美術領域を扱った研究は充実していると言えるが，一方で「デザイン」や「工作・工芸」領域に関するそれは十分であるとは言えない状況にある。さらに「デザイン」領域に関して言うならば，その実践や技法に関する研究成果は多数存在するが，専門教育を含めその教育を主題にした研究は未だに体系化されていない現状がある。本研究をめぐる命題，すなわち子どものためのデザイン教育に関するこうした状況から，本研究はその先駆的研究であると位置付けられる。

本論文は，序章と終章を含めて９の章からなっており，その概要は以下の通りである。

序章では，はじめにデザイン教育をその目的と実践の場によって分類する作業から，本論文で対象にする「子どものためのデザイン教育」の輪郭を描き出すことで実証的な規定を行っている。次に，その教育の現状から，本論文における問題の所在を明らかにし，「子ども」と「デザイン」とを結び付ける動きとして，「子どものためのデザイン／ Design For Kids」および「子どもによるデザイン／Design By Kids」が存在することを指摘している。そして本論文の目的は，後者の方向性を子どものためのデザイン教育において適用していくことであり，その達成のための方法とは，子どものためのデザイン教育の歴史的変遷過程における省察から浮上してくるアブダクションとしての「子どものデザイン」概念の変容・更新・刷新に対する分析を通して，子どものためのデザイン教育のあり方について実践的に提言することであることを提示している。

第１章では，我国の子どものためのデザイン教育が，その発端において省察的なまなざしを内包していたことを明らかにしている。昭和初期における構成教育運動に見る萌芽，続く戦時統制

下における体制強化との共鳴，そして戦後の無教科書時期における戦時の反省をふまえた新しい教育への志向を確認し，我国の子どものためのデザイン教育が，その出発点においては，「子どものため」という理念を謳いながらも，それが実践的には同時代的な社会のあり様のために目的的に利用されていたことを明らかにし，その省察として生まれてきた“オルタナティブ”な子どものためのデザイン教育に対する可能性を提起している。

第２章では，昭和 33 年版学習指導要領に「デザイン」が位置付いた経緯を俯瞰する作業を通して，当時の子どものためのデザイン教育が抱える問題点から，以下のようなあるべき「子どものデザイン」概念を提出している。「子どもの興味・関心に即した必然的なもの」「子どもの成長・発達に応じた系統的指導を有するもの」「基礎的な感覚練習から用途をもつデザインへと必然的に発展していく総合的なもの」「子どもの創造的問題解決を促すもの」

第３章では，前章での対象時期において噴出した「デザイン教育批判」の言説を分析し，その批判に対抗するための「子どものデザイン」概念の意義を検討している。その結果，「子どものデザイン」概念とは，「子どもの生活」「子どもの感覚」「子どもの成長・発達」「子どもの本能的欲求「造形学習の基礎」「子どもの切実な必然性」「創造的な問題解決の能力」という構成要素から規定されるものとしている。そして，これらの概念を子どものためのデザイン教育に対する省察ツールとして用いて，そのあり方を展望していくことの有効性を提起している。

第４章では，これまでに析出した「子どものデザイン」概念が，その後のデザインや社会の変化に応じてどのような様相を呈しているのかを検討している。同時代におけるデザイン界の動向，そしてデザイン教育研究を牽引する造形教育センターの研究活動の様相から，そこに内在する「造形理論」と「子どもの論理」とにおけるディレンマを見出している。そしてその克服の契機としての「造形遊び」そして「子どもの生活」という考え方の重要性を主張している。

第５章では，現代に至るまでの社会の進展やそれに伴う教育に対する要請，そしてデザインの拡大と変容の様相から，人間を中心に据えた現代デザイン（HCD：Human Centered Design）の実践の方向性が，子どものためのデザイン教育の目指す方向性と同期していることを明らかにし，その可能性について提起している。それは，〈いまーここ〉で感覚を働かせ，イメージを生成させながら，現実に対して創造的に問題解決を図っていくという能力が現代社会に対してもつ可能性である。この視角から「子どものデザイン」概念を具体的に検討した結果，上掲の概念の各要素が，主従的・相互的な関係をもった３次元的な構造を呈している様態を「子どものデザイン」概念構造スキーマとして整理している。

第６章では，デザインとデザイン教育との同期化に対して「子ども」という存在がどのようにかかわるかについて考察し，「子どものためのデザイン教育（For）」から「子どもによるデザイン実践（By）」へのパラダイム・シフトの重要性を主張している。そしてその実践の原理（理念・目標，内容論，方法論，発達論）を提示している。理念・目標とは，子どもたちが日々の生活において創造的なイメージを生成し，それを可視化することで他と関わりながら同時代社会の中でたくましく生きていくことを目指すものとしている。そしてそうした子どもの姿を実現するためのスコープ（資質・能力としての内容）として，「子どもの生活／Kids Life」「子どものまなざし／A Look」「つくりだす／Do it Yourself」「ブリコラージュ／Bricolage」「関係／Relation」を挙げている。さらには小学校第１学年から中学校第３学年までのシークエンスを提示し，実践を具

現化するための方法論として「子どもと教師の協働化」「ワークショップ」を導出している。

第７章では，子どもによるデザイン実践を開発・具体化するためのプログラム開発マトリクスを提示するとともに，それを用いた開発手順を説明している。そしてその実践の場として想定される「学校」「学校内外の越境」「日常生活」「社会化」というカテゴリーごとにプログラム事例を提示し，実際に実践を行ったプログラムを対象に実践研究を行い，その有効性を検討している。

終章では，これまでの研究の成果をまとめ，残された課題を提示するとともに，今後の展望について述べている。巻末には，文献一覧，子どもによるデザイン実践にかんする記録を添付している。冒頭で述べた通り，本研究は先駆的研究として位置付けられるため，これら資料の意義は大きい。